特集

「一握の砂」発刊から100年。

―啄木の残した宝物を、皆で次の時代へ。―

今年12月1日、石川啄木の第一歌集『一握の砂』は、発刊100年の節目を迎えます。来年4月は啄木の百回忌、再来年は没後100年、さらに同年の6月20日は『悲しき玩具』発刊100年を迎えるとあって、啄木の作品や生き方に触れる記念事業が3年がかりで予定されています。

地元住民なら誰しも一首は、口ずさむことができる啄木の短歌。しかし、じっくりその作品にふれる機会は意外に少ない、ということはありませんか。

今回は、『一握の砂』発刊100年を機に、啄木の魅力にもう一度触れ、未来へとどうつないでいくかを探ってみます。

天才歌人啄木を育んだ玉山の地から啄木の心を発信していこうと、思いを一つにする皆さん。左から石川啄木記念館・山本玲子学芸員、菅原壽館長、(有)大塚屋・駒井元さん、商工会議所玉山支所の中村俊明支所長。

『一握の砂』原本。この原稿料は、生後24日で亡くなった啄木の長男の葬儀代にあてられました。

石川啄木、その余りある魅力

啄木は、自然豊かな渋民村（現玉山区渋民）にて、その類いまれなる才気と感性を育みました。盛岡中学在学中から文学の道を志し、わずか16歳で上京。与謝野鉄幹の指導のもとで、詩人としてデビューして以降、26年余りの人生で実に多くの短歌、小説、評論などを残したのです。初の歌集として発刊された『一握の砂』、啄木の死後発刊された『悲しき玩具』では、独自の三行書きスタイルが高く評価され、今なお、彼の残した作品は、色あせることなくファンの心に息づいています。

その魅力にふれるべく、盛岡市玉山区にある「石川啄木記念館」を訪れました。現在の「石川啄木記念館」は、1986年に、啄木生誕100年を記念してオープンし、専門家からは「啄木研究における聖地」と、高く評価されています。

今回は、同館の菅原壽（ひさし）館長、山本玲子学芸員、地域住民の立場から啄木への思いを寄せる(有)大塚屋・駒井元（はじめ）さん、そして当会議所玉山支所の中村俊明支所長にお集まりいただき、啄木の魅力や地域での活動などを伺いました。

まずは、菅原館長に、啄木の歌人としての魅力をたずねます。

「第一に、それまでの和歌の流れにとらわれず、素直な思いを簡単な言葉で表現したことのすばらしさです。日常の題材を中心に、心の機微や自然の美しさなど、生活者の視点からこぼれ出た言葉は、100年後の今も世代を問わず、読み手を感動させてくれる。また、三行書きに示されるように、既存のスタイルにとらわれない啄木の短歌は、私たちに対し、自由な発想でものを考える大切さも訴えかけてくる」と、強く語ります。

『一握の砂』に込めた啄木の思い

啄木は、生活の中にある目立たない花やモノを敏感にとらえる感性を持ち、弱いものや小さなもの、貧しいものにも目を向けた作品を多く生み出しています。庶民の立場で歌を詠み、広く共感を呼ぶ作品を創りあげた歌人は啄木がはじめてとのこと。処女歌集『一握の砂』の特徴で、同歌集以降啄木が取り入れた三行書きのスタイルについて、山本学芸員はこう話します。

「一首を一行書きにすることに、ある不自然や不便を感じた、と啄木は語っています。歌は、心のリズムに合わせて三行でも四行でもいいのだと。さらに、後世の人がそれでも不自然を感じるなら、字余りでいいから自分の便利なように改善していいのだとも。それは同時に、社会において不便なことがあればどんどん改善していくべきだという、メッセージが込められているとも思います」。

実は、明治43年に『一握の砂』が発刊される以前、啄木は同タイトルのエッセイを2つも書いています。そこから見えてくるのは、啄木がいかに、一握の砂という言葉にこだわっていたか。

「手からサラサラとこぼれる、生命のない砂を歌にすることで、自分に生命あることを実感できたのでは」と山本学芸員。

このタイトルには、人間が生きることに対する啄木の内なる思いが込められているのです。

記念事業も続々と企画進行中

菅原館長は、脈々と100年受け継がれた啄木の短歌について、「これから100年後も彼の作品は生きていると確信している」ときっぱり話します。

いわば今年は、100年先に啄木の思いを受け継いでいく始まりの年。『一握の砂』発刊100年の記念事業は、6月の啄木祭で行われたトークイベントを皮切りに、第2弾となる企画展「龍馬と啄木～ふたりの目線」が、8月1日から始まっています。これは、高知県が啄木の父終焉の地であることを縁に実現した、タイムリーなコラボ企画です。

啄木研究家・岩城之徳さんから寄贈された研究資料の数々。近代を代表する文人たちとの関わりから知る啄木像には、新たな発見があります。

第3弾は、11月1日から始まる企画展「一握の砂を示しし人」。啄木の歌をビジュアル展示品と合わせて紹介し、五感で歌を体感できる企画です。さらに、第4弾として、12月1日の記念フォーラム。『一握の砂』に出てくる食材を使ったパーティも予定しております。

それぞれの啄木短歌への思いを明日へつなぐ

では、地域住民は、記念事業を盛り上げ、啄木の財産を次の時代に受け継ぐために、どんなことができるのでしょうか。玉山地域運営協議会の幹事長を務める駒井元さんに、地元での活動について伺いました。駒井さんは、渋民小学校に通った幼いころから、授業を通じて啄木の作品に触れる機会が多くあったといいます。

「とはいえ、啄木の歌の味わい深さを知ったのは、故郷を離れ再び戻ってきた時。心の底から啄木の歌に共感する思いでした。好きな歌を一首選ぶのは難しい。その時々変わる日々の感覚や叙情に、見事なぐらい啄木の歌はマッチしてくるのですから。これからは、その啄木の価値を、私たちがどう伝えていくかが大事だと思っています」と、駒井さん。

同協議会では、昨年は啄木祭を盛り上げようと渋民好摩地区の商店街を中心に、啄木の短歌を記した木製の短冊を100個掲示しました。今年は会議所が行う「短歌のまち　もりおか」の応募作品から年間グランプリと昨年優秀作品を同館に常設展示する試みも実施。今後も継続していく予定です。

記念館敷地内には渋民尋常高等小学校が、当時の雰囲気そのままに残され、まるで明治の頃に時間を遡ったかのようです。

まずは、自分だけの一首を見つけてみませんか

啄木が東京生活で詠んだ1000首余りの歌から551首を収めた『一握の砂』。

山本学芸員によれば啄木の有名な歌を知る人は多いのですが、知られていない歌にも、自分の心にぴったりとはまり、新しい発見があるのだとか。

いたく錆びしピストル出でぬ
砂山の
砂を指もて掘りてありしに

中にはこの一首のように、かの石原裕次郎の歌う歌詞に影響を与えた作品もあります。

「誰もが研究家にならなくていい。自分だけの一首を見つけることも楽しいのでは」と、山本学芸員。気負いなく啄木の世界に触れてほしいと話します。

盛岡のブランド推進事業の中核をなす、石川啄木。啄木を育んだ盛岡に暮らす私達も啄木という宝物を、『一握の砂』発刊100年という節目を機会に見つめ直し、まずその一歩として、自分の心にふれる一首を探してみてはいかがでしょうか。

取材／「SANSA」企画編集委員会

旧県立図書館前のヒマラヤシーダの一部を再利用し、「短歌のまち　もりおか」の入賞作品を常設展示。伐採された樹木に息を吹き込んだようで、啄木も喜んでいるかも。

啄木は、友人や知人に対し頻繁に手紙を書いていたとか。『一握の砂』発刊100年を記念し、封筒用シールを作成（150円）。また、記念切手の販売も企画中です。

■取材協力／石川啄木記念館：019-683-2315